

自分の小さい頃の季節は4つ。春夏秋冬。これを3か月毎に分けると、春は3月から5月、夏は6月から8月、秋は9月から11月、冬は12月から2月というイメージでした。そんな季節でその季節ならではの遊び食べ物暮らしを満喫してきました。まさに絵本やカレンダー通りの春夏秋冬でした。

今年の冬も10年に1度の大雪というニュースが何度も流れた割には、冬は、1月だけだったような気がします。12月も降ってもすぐに溶け、2月に入ったら、もうふきのとうという感じでした。最盛期の1月の親子雪遊びも、スロープのジャンプ台に雪を盛って遊びました。斑尾の希望湖も戸隠の鏡池も、積雪が少なく氷の状態も薄かったですし、大地クロカン出動も少なかったです。スキー場は雪がある程度あったようですが、営業期間は確実に短くなっているようです。

自然の気候で、自然の地形で、自然に遊ぶことの難しさが浮かび上がってきています。雪遊びも、お金をかけねばできない時代になってくるようです。

しかし、大地の子ども達を見ていると、やはり子どもは自然の一員、ほんのわずかな雪でも、少ない面積の雪でも遊びます！！泥でも土でもよくこんなに遊べるものだなあ、毎日飽きないで遊べるものだなあと感じることでしょう。(私たちは、当たり前前当然であることを知っていますが)

子どもとはそういう人種です。大人目線で見ると、大人自身は飽きて刺激の強い物を求めたり浮気をしたい衝撃に駆られますが、特に幼児は、継続して淡々と遊び続ける特性があり、それが安心安定した心なのです。そして、そこには、恐ろしい創造性想像性たっぷりの脳が働いているのです。遊びに飽きるのは、創造性想像性のない環境(自然環境 おもちゃなど)だからです。

そして、大人自身の飽きっぽさと退屈性。

「退屈は 創造力への入り口である」という言葉通り、子ども達には、退屈させない(大人自身が退屈さをコンプレックスにもったり、その気持ちを子どもに投射しない)ように刺激を与えたり連れ出すよりも、創造性がないと遊べない大人にとって退屈な環境こそが、幼児にとっては、エネルギー溢れる継続的な世界だと思えます。

現に、大地にはブランコも滑り台も遊具もありません。季節が変化してきても、大地の自然環境は変わらないので、永遠と遊び続ける子ども達の姿が、30年以上変わらずに繰り返されています。大人自身の姿勢が変わらない限り！！

1年間 素晴らしい子ども達との暮らしに感謝します。

## 【給食】

この一年、最後の給食は、パンとソーセージで先日有終の美を飾った。21人の子どもそれぞれの顔の形のパンを手にした時の子ども達のうれしそうなお顔は、今年一番の最高の宝物となったと同時に、久しぶりにゾクゾクした感動と涙を味わった。

文庫キャンペーン表彰式の機内食でおおぞらさん4人姉妹が動物の形をそれぞれ考えて楽しそうに作ってくれたパン。あまりに見事に楽しそうに美しく作ってくれたので、これをヒントに、いつかは全員の子どもの顔パンを作ったら、さぞうれいだろうな(受取手)と思うと同時に、この4人姉妹(大地を引っ張る信頼できるスタッフとしてこう呼んでいる)もうれいに違いない(日頃からそんな心意気で暮らしている素晴らしいおおぞらさん)と感じていた。

更に、3月初旬のラップ話株式会社のおはなしの慰労会。当初は、従来路線で、早朝登山やクロカンを予定していたが、都合により、早朝パンとソーセージ作りに切り替えた。朝5時ソーセージ作りに最適な冷え込みの中、朝5時からパンを成形、そしてソーセージを作り上げ、見事8時には、青空の下で、焼きたてのパンとソーセージのビュッフェで乾杯。長年作り続けてきたソーセージの歴史の中で、歴代トップの出来映えとなった。妻と子どもの精神的安定を図る夫としての最高のツールであるソーセージのお土産！？を持参して解散となった。その翌日、子ども達のお弁当にはそれが入っており、皆口々に「青ちゃんソーセージはおいしい」(今回は、青ちゃんではないのですが)と口々に叫んでいた。

これらの事があり、それでは何とか全員にこれらを実現してあげねばならないと決心した。

当初は、青山家のストック品のソーセージ(常に40本から60本)を使って、パンにだけ集中しようと思ったが、度重なる来客や友人達にソーセージを毎度のごとくプレゼントしているうちに、ストックが少なくなっていたと同時に、やはりやるなら、4人姉妹に作らせてみるのも素敵じゃないかと思ひ、全面的に子ども達に任せることにした。

4人姉妹は、前日粉を持ち帰り、自宅で練り上げ、翌日朝から厨房で、スタッフを含めて25名分のそれぞれの子ども達の顔パンを成形していった。名札の紙切れを選んで、一人一人の顔をなんだかんだと話ながら、見事に作り上げていった。そこには、下手だ上手だなどの評価や批評もなく、互いの顔パンに お互いに喜び感動うれしさが満ちあふれていた世界があった。約1時間素晴らしい時間が過ぎていった。

一方、年長児2名と1、2年生のおおぞら組は、朝の会が終了した後、ソーセージ作りの環境設定に合流。パンとソーセージ燻製の石窯とソーセージを茹でる竈の火起こしを受け持った。マッチと新聞紙だけをもらうだけの火起こし。大人の指図は一切ない。予想通り、竈組は、悪戦苦闘しながら、1時間近くかかっていた。傍らで、ソーセージ作りが始まっていたのに、それには目もくれずに、火が起きる過程、見事に火が大きくなっていく過程に感動しながら、結局最後まで、ソーセージ作りには来なかった。

パンの成形を終えた4人姉妹は、大人でも難しいソーセージ作りを任してみた。特に、均等の長さにそろえながら、捻って巻いていく作業。これが、見事にはまり、完璧な美しいソーセージが出来上がった。こちらも、当初は、風乾燻煙しないホワイトソーセージでも良いとタカをくくっていたが、あまりの出来映えに、薪ストーブで完璧に風乾して、石窯でしっかりと燻煙して、先日のラップ話株式会社と同じ行程を選ぶことにした。(最大の難所は、12時に出来たてを間に合わせる事。時間通りに出来たてを完成させる事も、職人の腕である！！)

風乾 石窯燻煙 同時に 発酵したパンを石窯に入れ、竈で70度お湯の維持のために温度計とにらめっこしている子どものお釜に燻製後のソーセージを入れ、時間通りゆであげ、それを再び石窯に入れて焼き上げる。時間は11時45分。皆で皿を並べ、リンゴをむき ブロッコリーを並べているうちに、お客さんの足音。着席と同時に、石窯から焼きたての顔パンとソーセージを引き出し、一人一人にそれらの乗ったお皿を配った。それを見た子ども達の顔は冒頭の通り。子ども達のお皿は空っぽになった。その後は、4人姉妹が、いつものごとく、洗い 拭き 乾燥 片付け となり、無事終了。

4人姉妹を1年を通して、信頼して 育児 炊事 労働 遊び を任せてきた。それを 下級生のおおぞら、そして 幼児たちは、憧れをもって暮らしてきたと思う。

生きる術は、自分で見つけ出さなくてはならない。その術は経験から生まれる。

例えば もし僕がある少年に一般教養を学ばせたいと思ったら、単に近隣の教授のもとへ連れて行くというありき通りのやり方は取らない。そこではあらゆることを教え、練習させてくれるだろうが、生きる技術は 教えてくれない。自分の目ではなく、望遠鏡や顕微鏡を通して世界を眺め、化学の勉強はしてもパンの作り方は習わず、機械学は勉強しても、どうやって暮らしを立てるかには教えてくれない。(ハリ・デイビッド・ジョー)

知っている と 認識は 違う。知識に 原体験が備わってこそ 認識つまり最高の知恵となる(大地)

